

総合資格学院

新宿校



総合資格 代表取締役

岸 隆司氏

Takashi Kishi

【Profile】1950年鳥取県生まれ。73年関西大学法学部卒業後、金融関係の企業に入社。78年資格ビジネスの立ち上げに参画するが会社が倒産し、80年に仲間と中部資格協会(現・中部資格)を名古屋に設立、代表取締役社長に就任。86年に東京に進出、翌年、総合資格協会とする。2011年日本経済団体連合会加入。

日経BPインフラ総合研究所長 建設局長

安達 功

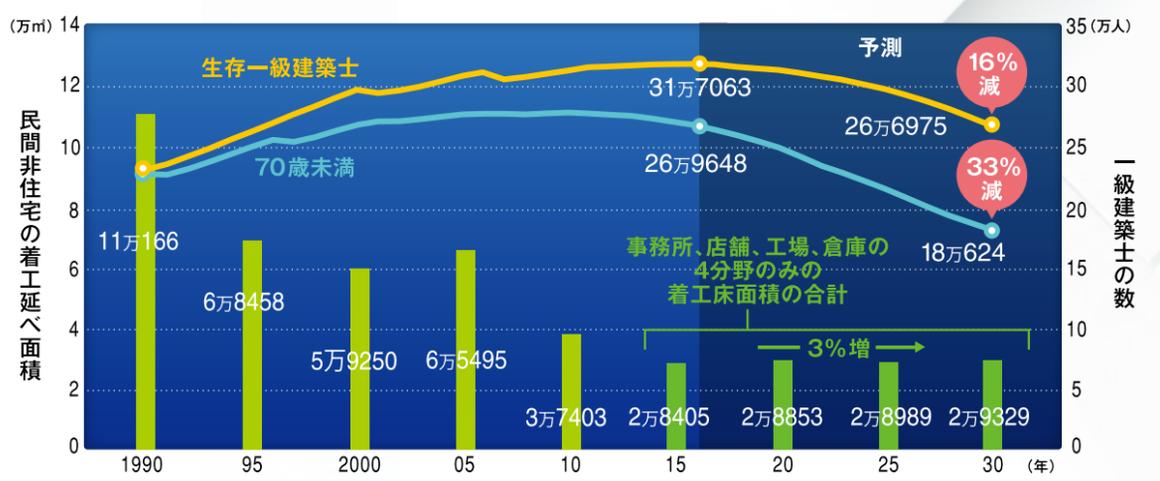
Isao Adachi

【Profile】1963年生まれ。86年東京理科大学工学部建築学科卒業後、エンジニアリング会社勤務を経て、日経BP社入社。日経コンストラクション編集部、日経アーキテクチャ編集部を経て、日経ホームビルダーの創刊に携わる。日経ホームビルダー編集長を経て現職。「東京大改造シンポジウム」「TARGET2020」などのシンポジウムのプロデュースなど、建築にかかわる幅広い活動を行う。

前編 「モノ」から「人」へ。建築界の未来を担う“人財”とは

市場の成熟期を迎え、需要創造が欠かせない建築界。そこで求められるのは、顧客にソリューションを提供し需要を生み出せる人材の育成だ。資格取得支援を中心に人材の育成支援にあたる総合資格と中部資格を率いる岸隆司氏と、建築界の将来を中長期の視点で見据える日経BPインフラ総合研究所の安達功が語り合う。

Data 1 着工面積は横ばいで一級建築士は減る 出所：日経アーキテクチャ 2016年 7月 14日号



安達 建築界はいま、人口、市場、価値観の3つの変化に直面しています。人口が減少し、市場が縮小するなかで新たな需要を生み出す必要に迫られています。一人ひとりが知恵を絞って工夫していかなければいけない。そして価値観の変化によって建築が工事業からサービス業への変革を迫られるなか、ものづくりだけでなく、ソリューションの提供も求められていきます。変化に対応できる人づくりが、ますます重要になっています。

岸 ところがいまは、その前提ともいえる資格を持った技術者が不足しているのが実情です。

心の技術者が減っているというのは、由々しき問題です。若い世代の数そのものが減っている以上、一級建築士試験の合格者を増やすほかありません。

岸 そうですね。ただ一級建築士の試験は難しく、そう簡単には受からない。近年、学科試験は合格率18%前後です。設計製図試験でさらにその4割に絞り込まれます。大学で建築を学び、会社で実務経験を積んでも、ストレートでは、100人中7人しか受かりません。

術者の育成が急務です。構造設計一級建築士、設備設計一級建築士、設備士といった専門性の高い資格を持つ技術者の役割も、一層高まっています。

様 様々な資格取得を支援するという立場から、総合資格学院では人材の育成をサポートしています。合格実績をみると、一級建築士試験のストレート合格者の約6割がその受講生という合格率の高さが目を引きまします。その高さの秘訣はどこにあるのですか。

岸 学習した内容に関しては満点を目標に確実に合格点を取れる指導を徹底しています。講義内容の理解度をテストで確認し、理解が不十分なら教室に居残って学習し直してもらいます。そしてその内容を、宿題を通して学び直してもらい、さらに次の週に類似の問題で理解度を確かめます。その繰り返しです。それを徹底するので、総合資格学院で学習し続けた受講生は確実に合格できるようになるのです。

安達 学習内容の定着を図るのは、程度の差はあるにしても、どこも一緒だと思います。競合他社と決定的に異なる点も、あるのではないですか。

岸 一般的には過去に出題された試験問題の学習が中心です。確かに、それで試験に

例 えば団塊の世代では年間1万~1万2000人が一級建築士の試験に合格していました。しかし、その世代は雇用延長も終わったため、一級建築士はこの5年間でいえば計5万~6万人が現場を退いています。一方で、一級建築士試験の合格者数はいま、年間約4000人にすぎません。差し引きすると、年間6000~8000人も減っているわけです。

安達 ストック活用の時代を迎え、建築にはものづくりを超えた高度な能力が求められるようになってきました。そういうなかで肝

設計事務所では、例えば入社10年目でプロジェクトのリーダーに据えたいと考えても、一級建築士の資格をまだ持っていないので任命できない、という困った事態が起きています。そのため、企業側は在学中から実務に通じる知識を学んでほしいと考えています。大学院生は二級建築士を取得することが、学部生は入社1年目に二級建築士を取得できるように入社前から資格取得に向けた学習を始めることが求められています。

安達 自然災害に対して安心・安全で、省エネ性の高い建物が求められている時代です。耐震偽装や杭データの改ざんなど建築界に不信感を持たれる出来事も相次ぎました。高度で最新の知識と倫理観を持つ技

師の育成が急務です。構造設計一級建築士、設備設計一級建築士、設備士といった専門性の高い資格を持つ技術者の役割も、一層高まっています。

様 様々な資格取得を支援するという立場から、総合資格学院では人材の育成をサポートしています。合格実績をみると、一級建築士試験のストレート合格者の約6割がその受講生という合格率の高さが目を引きまします。その高さの秘訣はどこにあるのですか。

岸 学習した内容に関しては満点を目標に確実に合格点を取れる指導を徹底しています。講義内容の理解度をテストで確認し、理解が不十分なら教室に居残って学習し直してもらいます。そしてその内容を、宿題を通して学び直してもらい、さらに次の週に類似の問題で理解度を確かめます。その繰り返しです。それを徹底するので、総合資格学院で学習し続けた受講生は確実に合格できるようになるのです。

安達 学習内容の定着を図るのは、程度の差はあるにしても、どこも一緒だと思います。競合他社と決定的に異なる点も、あるのではないですか。

岸 一般的には過去に出題された試験問題の学習が中心です。確かに、それで試験に



岸 建築士では、1教科あたり約100人、全講座計1300人にもよる講師陣です。大学の先生、建築行政の法規担当、ゼネコンの技術者らで制作委員会を組織し、社員とともに教え方を研究したりテストの問題を作成したりしています。こうした講師陣が、確実に合格点を取れる講義づくりを支えています。受講生が安心して学べるように、講

学校教育と実務で必要とされる能力の乖離をいかに埋めるか

対応できた時代もありました。しかし、いまは違う。技術革新のスピードが速く、関係法令や技術基準も次々に見直されます。それに対応して新しい問題が出るようになったので、最新の法令や技術を前提にカリキュラムを組まなければ試験を乗り切れません。法規関連であれば、改正後2、3年すると、その改正に対応した問題が出てくるようになります。出題傾向を分析し、近く出題されそうな内容は確実に覚えよう、と受講生に呼び掛けています。

時 代の変化にこまめに対応できるようにテキストをオリジナルで作成したのは、事業を始めた名古屋から東京に進出して間もない1992年です。それまで使用していた市販テキストを時代に見合ったものに見直してもらうように出版社に掛け合ったものに対応してもらえなかったためです。国立国会図書館で一級建築士試験の問題を第一回の分から全てコピーして時代の流れを読み取ったうえでテキストの作成を進めていきました。完成までに約2年かかりました。

安達 指導の徹底に加え、時代への対応にも努めているのです。それを可能にしているのは、何ですか。

師による補習システムも確立しています。幸い、大学の先生にとっては卒業生が、ゼネコンの技術者にとっては後輩社員が受講生にいます。先生や技術者の方々に講師への就任をお願いすると快く引き受けていただけます。皆さん、一生懸命に教えてください。 **安達** 人材育成のサポートという点では、総合資格学院では資格取得支援のほか、多様な活動を展開されていますね。 **岸** 一つは、全国各地で開催される「卒業設計展」の協賛です。いまは40近い設計展の運営をサポートしています。学生の作品を

大学の枠を超えて評価し合う場ですから、そこで発表したり評価を受けたりすることで、表現力が上がり、視野が広がります。学内で評価されず、建築の道を断念しかけていた学生も、ほかの大学の先生から評価されることで自信を取り戻すことがあります。

卒 業設計展をはじめ、様々な設計展の作品集も発行しています。「地方学生の作品を多くの人に紹介できる」と、関係者の皆さんには非常に喜ばれています。作品集をきっかけに、設計展で受賞した学生が設計事務所から声を掛けられて、そこに入社した例もあります。

安達 卒業設計展のような場で表現力を高め、視野を広げられるというのは、技術者としての成長を考えると、貴重な機会です。卒業設計の段階だけでなく、もっと早い段階からそうした機会を提供できるといいですね。

岸 大学3年までに取り組んだ設計課題を対象に開催される「建築新人戦」という作品展が、そうした機会の一つです。そこでも特別協賛者の立場で運営をサポートしています。さらに、アジア各国から参加校が増えてきたのをきっかけに2013年にそこから

分離・独立させた「アジア建築新人戦」でも、同じく特別協賛者の立場で運営をサポートしています。昨年10月はベトナムで開催され、アジア15カ国から25作品が集まりました。今年はモンゴルで開催される予定です。

安達 これらの設計展に参加することによって、建築以外の分野と連携するのに欠かせない多角的な視点や、海外展開に不可欠のグローバルな視点が養われそうです。これからの人材育成に不可欠な活動も支援しているわけですね。

岸 支援の対象は各種の設計展や建築系イベントの開催にとどまりません。フィールドワーク、地域活動、実験、海外視察など、大学側や学生グループから要請があれば、幅広く対応しています。

安達 建築家の伊東豊雄氏が主宰する「伊東建築塾」への支援も、人材育成サポートの一環ですか。

岸 そうです。伊東さんは建築塾の活動を通して、時代や社会に求められる若手建築家の育成、地方都市のまちづくり、子ども建築塾の運営に取り組まれています。2011年開催の卒業設計展で伊東さんが審査委員長を務められたのをきっかけに出会い、理念に賛



「伊東建築塾」の活動を通して若手建築家の育成などにあたる伊東豊雄氏。その活動を2011年の立ち上げから支援し続けている



全国各地で開催される卒業設計展をはじめ、各種の設計展や建築系イベントの運営を協賛者の立場でサポートする



運営サポートにあたる設計展では、その作品集の発行も手掛ける。地方学生の作品を多くの人に紹介できると好評だ

Data 2 総合資格学院における一級建築士試験の合格者占有率

平成27年度 一級建築士試験

設計製図試験



全国合格者合計 3,774人中
総合資格学院現役受講生 2,149人
(平成27年12月17日現在)

学科試験 + 設計製図試験



全国ストレート合格者合計 1,594人中
総合資格学院現役受講生 965人
※ ストレート合格ノ一年で学科・製図試験を合格すること

同しました。それ以来、支援を続けています。

安達 総額でいえば数億円規模の支援になります。それを続けていくというのは、企業として負担ではないのですか。

岸 学生は業界の将来を担う皆さんです。卒業設計展で一級建築士試験の合格実績をみてもらうだけで宣伝にもなります。テレビCMに比べれば、広告効果ははるかに高い。学生にも大学の先生方にも私たちにもメリットがある、「三方よし」の投資です。

安達 そう位置付けると、まだまだ展開の余地はありそうです。技術者の育成を支援

するという立場で、どのような展開をお考えですか。

岸 各企業の技術ノウハウを共有できるプラットフォームづくりです。業界団体の主導では実現が難しいのが実情です。業界では、それを第三者の立場で成し遂げられるのは私たちだけではないか、といわれます。より良い建築を目指し、技術力の向上につながる活動を展開していきたいですね。

私たちがサポートできる点はまだまだあるはず。それをしっかりやり遂げ、これから求められる人づくりに貢献してまいります。

次回(9月8日号)は「建築士試験のいま」について対談します

お問い合わせはこちら

 **総合資格学院**

東京都新宿区西新宿 1-26-2 新宿野村ビル 22F
TEL.03-3340-2810 <http://www.shikaku.co.jp>